

文献紹介 こころの哲学

今号の編集部の企画枠は、「こころの哲学 (philosophy of Mind)」に関するここ数年の雑誌論文の紹介にあてて。今回は特に、論文の歴史的背景の理解のために解説を掲載する。

「心の哲学 philosophy of mind」を理解するために

現在英米哲学において「心の哲学」と総称されている領域は実に様々なトピックを含んでいる。本号でレビューされている諸論文はその拡がりを如何なく示している。しかしこうした表面的な多様性の背後には、戦後の英米哲学史のなかで培われてきた固有の「伝統」が存在し、この「伝統」のなかで発展してきた独特の「関心」と「問題」をはなれて今日の「心の哲学」はない。それらの諸論文も又この「伝統」に深く根ざしており、その正当な評価はこの「伝統」を無視しては困難である。「心の哲学」とは決して「心」に関する 哲学的考察の一般的呼称ではないのである。「心の哲学」の「現在」を理解するための最小限の予備知識として、以下でこの「伝統」の現在にまで至る展開を概観する。

この「伝統」は戦後すぐに出版された二つの重要な著作に始まると言ってもいいだろう。それはギルバート・ライルの *Concept of Mind* (1949) とヴィトゲンシュタインの *Philosophical Investigations* (1953) である。今日なお強い影響力を保ち続けているこれらの著作は、二つの共通した特徴を持っている。その特徴とは(1) デカルト的二元論に反対し、心的実体という固有の領域の存在を否定し、(2) 「心」の問題を「心に関する言葉の使用法」の問題としてとらえる、ことである。ライルとヴィトゲンシュタインによってもたらされた反二元論と言語主義はその後の「心の哲学」の基調を決定したいと言っても過言ではない。どのような立場をとるにしろ、この二点は「心の哲学」においてその後避けて通れぬ問題となるのである。しかしこの二著作はその内容が豊富なため、「心の哲学」に凝集力のある問題を提起したというよりは、全体のトーンを定めたというのがよりふさわしい。この時期の「心の哲学」の状況を知るためには V. C. Chappell 編 *The Philosophy of Mind* (1962) が便利である。「心の哲学」全体を一つにまとめるような中心課程の設定は所謂「心身同一説 mind-brain identity theory」の出現を待たねばならない。J. J. C. スマートの歴史的な論文(“Sensations and brain processes” (1959)) に端を発する同一説をめぐる論争は、70年代初頭にいたるまで「心の哲学」の中心を占めることになる。同一説の基本テーゼが「心的現象は脳の物理的過程に他ならない」というものであるため、ライル、ヴィトゲンシュタインらの議論が極めて言語的であったのに対し、この時期の議

論はより存在的となる。この時期の主要な論文は David Rosenthal 編 *Materialism and Mind-Body Problem* (1971) と C.V.Borst 編 *The Mind/Brain Identity Theory* (1970) に収められているが、特に Rosenthal の解説は複雑な同一説論点を整理する上で有益である。

この同一説を巡る議論は70年代中期以降急速に影をひそめることになるが、それは単なる流行の変遷ではなく、同一説自身が内包していた不充足性の帰結であり、現在の「心の哲学」の多様性の一因は、様々な論者が様々な仕方でのこの不充足を克服しようとしたことにあるといえるだろう。しかし、同一説の終焉の中から輩出してきた諸潮流を概観する前に、現在の「心の哲学」と同一説論争期の議論をわかつ大きな違いについて触れねばならない。

同一説において「心的現象」として理解されたのはもっぱら「痛み」などの「感覚 sensation」であった。それは、J.J.C. スマートによる同一説の構築が主として「感覚」をターゲットとしていたためである。しかし「心」は行動との関連抜きには決して理解されないし、人間の行動と「心」の関係を理解するには「痛み」等の「感覚」のみならず「思考」、「信念」、「欲望」、「知識」といった志向対象（命題内容）を持つ所謂「命題態度 propositional attitudes」をどうしても考察の射程にいれなければならない。同一説論争の限界は、こうした「命題態度」について全く論じられなかったことにある。この点を鋭く指摘し、「感覚」から「命題態度」、「志向性 intentionality」、「内容 content」へと「心の哲学」のテーマが大きく移り変わるきっかけを作ったのが D. デイヴィッドソンの一連の論文である (D. Davidson *Essays on Actions & Events* (1980), 第三部所収)。「心の哲学」が現在のような形態をとるにあたってデイヴィッドソンが与えた影響は極めて大きいのである。

さてアフター・デイヴィッドソンともいうべき70年代以降の「心の哲学」において目立った潮流として以下の四つが指摘できるが、それらの源流はいずれもそれ以前の「心の哲学」の歩みのなかにあることを再度指摘しておきたい。

(1) チャーチランド夫妻らに代表される古典的 eliminative materialism (EM) 固持派。EMは同一説論争の中でR. Rorty によって提唱されたいわば同一説最左派で、自然科学の進歩に伴い「心」といった概念そのものが消滅すると主張した。チャーチランドらは現在もなおこの EM をその原形に近い形で保持しつづけている。彼らは「命題態度」や「志向性」については端的にその実在性を否定し、そうした概念がいずれ消滅すると予想している。

(2) T. ネーゲルに代表される「主観的体験重視」派。同一説論争における最大の争点の一つは、感覚が脳の過程であるとしても、我々の主観的体験が客観的物理過程でありえるのか、ということであった。現在のネーゲルはこうした視点をさらに進め、主観的なものの価値を客観的事実には還元できないものとして前面に押し出すに到っており、倫理学における功利主義批判とも密接な関係をもっている。

(3) J. A. フォーダーや Z. パイリシンに代表される「思考の言語」派。デイヴィッドソンの転回の帰結は、「命題態度」に焦点を当てる時心的カテゴリーと物理的カテゴリーの一対一対応という素朴な同一説がもはや維持できないということである。こうした事態を前にし、「命題態度」とその「志向性」の実在性を認めつつもなお物理一元論を貫こうとするのがこの派であり、脳とコンピューターのアナロジーによってこうした立場が可能となると彼らは考えている。認知科学において強い影響力をもっている。またこのグループは最初 H. パットナムによって提唱された「機能主義」から強い影響を受けている。

(4) D. デネットに代表される「インテンショナル・スタンス」派。フォーダーらとは異なりデネットは「命題態度」とその「志向性」の実在性を認めない。しかし彼は EM とも異なり「信じる」などといった「志向性」に関わる言葉が人間生活においてもつ固有の価値も認め、それらが将来消滅するとは考えない。彼はこうした言葉の使用を「インテンショナル・スタンス」と呼ぶ。これはライルー・ヴィトゲンシュタイン以来の言語的アプローチの伝統を受け継ぐグループである。(鬼界彰夫)

＜参考文献＞

- N. Block(ed.): Readings in Philosophy of Psychology vol. 1, 1980, Harvard U.P. (特に, T. Nagel と H. Putnam の論文を参照)
- P. M. Churchland: Scientific Realism and the Plasticity of Mind, 1979, MIT Press.
- P. S. Churchland: Neurophilosophy, 1986, MIT Press.
- D. C. Dennett: Brainstorms, 1978, Harvester Press.
- J. A. Fodor: The Language of Thought, 1972, Harvard U.P.
- : Representations, 1980, MIT Press.
- Z. Pylyshyn: Computaiton and Cognition, 1984, MIT Press.

CHURCHLAND, Paul M.: "Reduction, Qualia, And The Direct Introspection Of Brain States." *Journal of Philosophy* 82 (1985), 8-28.

経験の現象学的性質や感覚的性質の、神経生理学理論による物理的還元は不可能である、とする反還元論者を論駁することを意図し、論者は先ず、理論間の還元一般の条件を問う。「還元」と「対応規則」についての古典的解釈は斥けられ、それらのより一般的法則論的解釈と、謂る創発的性質 (emergent property) の概念が概略的に述べられる。この解釈に基づけば、直接的にせよ、間接的にせよ、経験の創発的性質は神経生理学の理論からは引き出され得ぬという反還元論者の論処は、還元に対して不当な要求を行っており、如何なる新しい理論の概念

枠をも還元力不能に貶めるものであり、実情にそぐわぬ不健全なものとされる。還元論者は意味論的虚偽，論点先取の虚偽，語の多義的使用の虚偽等により不合理な推論を行っているとし，論者は，神経生理学の与える概念枠が，我々の生来の感覚や内省に，より優れた識別力や分別をも与えるということから，還元を支持することの正当さを主張する。

(森田恭子)

FISCHER, Roland. "Emergence Of Mind From Brain : The Biological Roots of The Hermeneutic Circle," *Diogenes* 138 (1987), 1-25.

歪曲プリズム眼鏡をかけると網膜にゆがんだ像が生ずるが，被験者に動く自由を与えるとゆがみは徐々に消失する。このような対抗適応の例を軸にしながら，階層的に組織化された脳においてシナプス回路とフィードバックサブシステムの数が増加するのにしたがって脳の機能から心が発現することを，そして心が循環構造をもった非局所的なものであり，外的姿勢と内的態度という両側面を携えた「行動」に他ならないことを著者は主張する。論文は序，「脳と心の境界で」，「心はここになく，そこになく，何処にもなくて何処にもある」，「意味の創造と解釈学的循環」，「刺激と予期の相補性について」，「解釈された感覚としての知覚，自己解釈の解釈学的循環」，「中枢神経を交感的に喚起する際の対抗適応と認識」，「対抗適応経験のいくつかの種類について：祈禱，偽薬，心理療法」の8つの部分より成る。

(副島 猛)

FOSS, Jeffrey. "Is The Mind-Body Problem Empirical?" *Canadian Journal of Philosophy* 17 (1987), 505-532.

materialism, property-dualism, emergentism, functionalism, interactive dualism, idealism, epiphenomenalism という，心身問題に関する七つの主張を，論者は検討する。論者によれば，これらの主張は，経験的事実によって反証可能，あるいは科学理論と同程度に確証可能である。それ故，心身問題についての理論は，科学理論と同様に，経験的理論である。

論者は，上記の七つの主張のそれぞれに対して，どのような経験的証拠が，その主張を反証，あるいは確証するのか，ということを示していく。これが，論者の検証の基本的方法であるが，論証の根拠となっている考え方は，検討する主張によって異なっている。

なお，論者は，心身問題を解決するためには，アプリオリな考察のみでなく，経験的考察も必要であると考えている。本稿には，この考え方との関連において書かれたものである。

(伊藤省三)

GAUKER, Christopher. "Mind And Chance." *Canadian Journal of Philosophy*

17 (1987), 533-552.

人間の身体構造は、その心理状態を決定するのに十分な条件であろうか。身体の微細な内的構造まで一致する二人は必然的に同じ信念や願望を持つのだろうか。この問題を解決する際には、人間の情意面をどのように説明すべきが重要となる。仮に心の動きが万人に普遍的に妥当する心理学的法則に支配されていると考えるなら、人間がその置かれている環境から蓋然的な規制を受け、偶然に任せて心を決めてしまうように見える場合を説明する道が閉ざされるだろう。このことから筆者は、心理学的法則を裏付けとし始めに挙げた問題に肯定の回答を与えようとする一部の機能主義的見解をその変型を拒否し、むしろ我々はせいぜい人間の行為を説明し予期するのに必要な方法論的原理を有しているに過ぎないと断定する。その上で問題解決のために、情意面の属性たる言語行為の機械論的説明が必要だと主張するのである。(田中一馬)

Gillett, Grant R.: "Brain, Mind, and Soul," *Zygon*, 20, 425-434.

我々は、人間が精神的で魂を持った実体であり、また身体的性質を持っていると考えている。人(person)の特徴的性質は、同一性を持つこと、生活の質を持つこと、責任を持つことである。これらの考え方は、人間についてのデカルト的即ち二元論的考え方の中では、うまく成立しない。というのも、精神が内的領域であるという考え方には、難しい問題が伴っているからである。人間は精神的で魂を持った存在であり、物質的概念によっては補え切れない。では、人間を精神的な存在として理解するためにはどうすればよいのか。思考、行動、人間相互の行為は、身体的実体を必然的に含んでおり、その身体的実体の属している世界の本質は、科学的記述によっては、完全に補えられない。このように考える場合にのみ、人間を精神的な存在として理解することができるのである。(伊藤省三)

HOCHE, Hans-Ulrich. "Das Leib-Seele-Problem: Dualismus, Monismus, Perspektivismus," *Philosophia Naturalis* 24 (1987), 218-236.

身心問題を解決せんとする場合、その問題構成が重要となる。意識の体験者としての私自身の心と観察者としての私が把握した限りでの他者の心との間のカテゴリー的区別に基づくなら、問題は私自身の身心に関するそれと他者の身心に関するそれとに画然と整理できるだろう。一応従来関心の的とされて来た身心問題は、本来観察者のパースペクティブに則った限りでの身体機能と、本来体験者のパースペクティブに則った限りでの意識体験との関係を問うものとして構成されている。筆者はこうした問題構成を、ライルに従って「カテゴリー錯誤」の一例であると断じ、そもそも両者の同一性や実際の関係の如何を問うことが無意味だと主張する。また量子力学の概念を借りて、この両者は相補的關係にあるとも説

明する。筆者は現象学や言語分析の見地も援用して、身心一元論や二元論の伝統的主張に潜む共通の前提を摘出し、その問題性を暴くのである。（田中一馬）

HUNTER, J. F. M. "The Concept, 'Mind'." *Philosophy* 61 (1986), 439-451.

心とは何か？ この論文はそれが、人間の様々な表現活動の源にある発動者（agency）という架空の存在物（entity）にすぎないことを論証する試みである。まず日常会話における mind の用法・用例が検討される。ついで「Xとは何か」という問いの分析を通じて、心を問うことが既に心を対象化しているということをはっきりさせる。そして心身問題は一般に思考・想像等を扱うが、そのことは必ずしも心がそういう諸作用であることを示さないこと。D. M. Armstrong や G. E. Moore のいう意識的事象や過程も心の存在証明にならないこと。Hume の議論も心の存在をいかにして知り得るのかという問題が残ること。心を存在物として問うことは概念の問題であるよりはむしろ経験的問題であるが、心の機能を枚挙し尽くすことはできないこと。仮に表現活動が視覚化できてそれを心といっても、それは単にそう名付けたにすぎず、心の存在を経験的に再吟味しなかった Descartes も（それが物的であるが故に）それを心とは区別するであろうことを論じている。（小川清次）

LARMER, Robert. "Mind-Body Interaction And The Conservation Of Energy." *International Philosophical Quarterly* 26 (1986), 277-285.

「心とは身体から区別される非物理的実体であるが、それにもかかわらず身体に働きかける。」という説は今日では有力なものではなくなっているが、その主な理由の1つとして、エネルギー保存の法則に反するということが挙げられる。著者の目的は、このような側面からなされる心身相互作用説への批判を吟味し、その不十分さを指摘し、論争を問題の本質に向けかえることにある。著者によれば、通常エネルギー保存の法則と呼ばれるものには「エネルギーは生成、消滅しない。」という強い形式のものと、「因果的に孤立した系ではエネルギーの総量は一定である。」という弱い形式のものがある。ところで、実験データが支持するのは両者のうちの弱い形式のみであり、さらに心身相互作用とこの弱い形式は両立可能である。したがって論争は、エネルギーを生み出すことができる非物理的な心が存在するかどうか、ということに向けられねばならない。（副島 猛）

LE PORE, Ernest, and Loewer, Barry "Mind Matters." *Journal of Philosophy* 84 (1987), 630-642.

D. Davidson の「非法則的一元論（anomalous monism=AM）」は随伴現象説にすぎないという議論を反駁しつつ、AM を修正する試みがこの論文の主題であ

る。AMは(1)精神と身体との差別(distinctness)を事象に関しては否定し、事象の属性(property)に関しては主張するが、(2)精神と身体との因果的相互作用、(3)身体の因果的完結性、(3')あらゆる因果関係の身体的因果関係への還元性については属性に言及しないまま主張する。そして(2)(3)(3')についてのこの不十分性が上の議論を引き起こしたとして、筆者等は精神的属性に注目し、事象間に反事実的依存性(counterfactual dependency)があることとAMとが矛盾しないことを示す。このことは属性に関して(2)を主張し(3)を否定することであり、或る事象の身体的側面(feature)は別の事象の精神的側面に反事実的に依存することになる。しかし(3')は因果関連(causal relevance)をふたつに区別することによって救われる。精神の自律性は十分に保証され、身体に還元されて物理法則に支配されることはないというのが筆者等の結論である。

(小川清次)

PLYSHYN, Zenon W. "What's In A Mind?" *Synthese* 70 (1987), 97-122.

心理学は何についての科学なのか。どんな種の現象が集まって、心理学の領域ができていいのか。これがはっきりしていないところに、心理学のむずかしさがある。ところが、心理学に固有の領域を自然から自然な節目にそって切り取ってくることに、問題がある。そればかりか、そのような自然の領域は存在しないように思われる。

そこで、筆者は、その自然な節目の基にある或る区別を提示する。その区別は、何かの系のふるまいの中で観察された規則性を説明するしかたの間の区別である。ひとつの方法は、その系に内在する性質や機構に訴える。他方は、それが表象を有し、自然法則に包摂されない法則性で表象が操作されているということを前提する方法である。筆者は、後者の方法が心理学に必要なことを明らかにして、この説明のレベルの違いを示すことで二つの自然の領域の存在を主張する。

(布施伸生)

SKILLEN, Anthony. "Mind And Matter : A Problem That Refuses Dissolution." *Mind* 93 (1984), 514-526.

物心についての不整合な3つの基本的テーゼ、(1)物理的事象の原因は物理的なものである、(2)心的事象は物理的変化を引き起こしえる、(3)心的事象は物理的なものではない、が最近の諸議論の批判検討を通じて吟味される。

Ryle は(3)を支持しつつ相互作用説を否定し、規範的法則と自然法則の両立可能性を主張するが、彼はそれらの間の関係そのものの解明をなしていない。また Putnum は、物理学的還元主義に対してより高次の法則を備えた心理学の自律性を主張し、物理的決定論ないし(1)をアブリオリに否定しているが、彼は有機

体の物理学と物理学一般とを混同している。心身の非法則的一元論 (anomalous monism) を唱え、心身の同一性を主張する Davidson の記述的付随現象論の立場は、彼の意図にも拘わらず(2)の否定に繋がり、彼の法則の記述的理解、心的事象のホーリスティックな理解等との不整合により極めて不安定なものとなる。

これらの諸見解を斥けた後、論者は(1)(2)はあくまでも固守すべきとの立場から、概念的形式の一元論を提唱する。(森田恭子)

SLEZAK, Peter. "Actions, Cognition And The Self." *Synthese* 66 (1986), 405-435.

行為の説明は、たいいていの場合、二種の原因の観念の混同を含んでいる。「基本的行為 basic action は原因をもつ」と言われる場合の意味における原因の観念と、「行為者 agent が出来事の原因である」と言われる場合の意味における原因の観念とは、種的に異っているのである。ただし「基本的行為」とは、他のいかなる動きも前もって要せずに直接的に為された動き——例えば「手をあげる」というような動き——のことであり、行為者が、原因となる他のどんな行為も為さずして、為す行為のことである。

ところで、行為者自身が彼の外部世界の或る出来事の原因であるならば、この意味での因果連関においては、この行為者の振舞い behavior それ自体は、純粹に論理的な理由によって、いかなる原因ももち得ないことになる。そしてここで、上記の前者の原因の観念への移行が必然的（および無反省的）に生ずるのである。(戸島貴代志)

STICH, Stephen P. "Could Man Be An Irrational Animal?" *Synthese* 64 (1985) 115-135.

人間は合理的な動物であるとするアリストテレス的な考えは、批判されてきたし最近の心理学者の実験もそれに否定的である。しかし、経験的な証拠は人間が非合理的であるという結論を支持することはできないとして合理性を擁護しようとする哲学者の反論も最近起こってきている。筆者は心理学の実験を援用しながら、非合理性が実験によって論証されないという哲学的議論は誤りだとする。①他人に信念を帰す時、intentional system とみなしているものであり、合理的とみなさざるを得ない。②自然淘汰によって、人間は合理的な推論をするようになっている、③運用において誤ることはあるが人間は皆同じ合理的な認知的能力を持っている、という D.C. Dennet ①②の議論と、Jonathan Cohen ③の議論が検討されるが、それぞれ① intentional な用語を用いて、人が矛盾した信念を持つということは不整合ではない。②自然淘汰によって合理的な信念が生じるとは限らない。③認知的能力は一つではない、という点から反駁される。(岩崎豪人)

《以下は，“MATTERS OF THE MIND”と題した *SYNTHESE* 53 (1982) の特集より》

DENNET, Daniel C. “How to Study Human Consciousness Empirically.” 159-180.

筆者の主張は、意識の経験的な研究が全く可能だということである。これは自明のことに思われるかもしれない。しかし、トーマス・ネーゲルのような人々は次のように反論する。つまり、私たちが意識の主観的世界に迫るにつれて、科学の客観的世界は遠のいていくと。

そこで、筆者は、研究方法の記述で主張の支えとする。その方法はヴントやシュッツの考えに似ていて、その中に新しいところはほとんどない。けれども、彼の方法の特質は最小限の要求である。つまり、意識が何であるかなどについて用心深く何も言わないことで、研究を始める。たとえば、研究者は世界の記述をするが、その中の客体が何であるか、何でできているかという問いには、何でもないと答える。記述の対象は虚構的である。あるいは、扱う理象が言語的であることを前提しない。そして公共的なテキストと私的な表象の関係に対して中立的である。

RORTY, Richard. “Comments on Dennet.” 181-188.

ローティには上の論文の本旨に関して争うところはない。ネーゲルに対してデネットと同じ側に立って、内側から知られる意識の性格から生ずる問題を、運動の研究との類比から論じている。ただ、彼は、デネットの言葉使いに言及しながら、真の問題は、そのような問題を説明することでなくて、意識の研究が方法論的に見て他のどんなものの研究とも同様であることを説得力をもって示す方法だと言っている。

(布施伸生)

PARFIT, Derek. “Personal Identity and Rationality.” 227-242

人格の同一性について、それを記憶などの連続性に還元する立場 (Complex View) と、それは他のものに還元できないとする立場 (Simple View) とがある。論者は前者の立場を取り、その立場を採用するならば、自分にとって最善となるであろうことに等しく関心を払うのが合理的である、という考え (Classical Prudence) を捨てなければならないことを示そうとする。すなわち、Complex View によれば、人格の同一性は程度問題である。そして、程度問題であるような事柄について、もしそれが程度の低いものであるならば、それをより重要度の低いものとして扱っても不合理であるとは言えない。そして、より遠い将来の自分との同一性は、より近い将来の自分との同一性よりも重要度がより低いと考えることができる。したがって、近い将来に関する利益の方を重要視するのは不合理ではないことになる。

REGAN, Donald. “Comments on Parfit.” 243-250.

論者は Parfit の論旨を基本的に認めつつ、いくつかの問題点を指摘している。ある時間における人間が別の時間における人間へと飛躍無しに連続して発達しているなら、両者は同一の人間であると考えれば、Parfit のように同一性を程度問題と考えなくともよくなるのではないか。また、自分の将来の利益を軽んずる者に対して我々が一般に行っている批判の根拠となるのは合理性ではなく、道徳であると示唆しているが、それは道徳概念を拡張することになるであろう。(浜岡 剛)

MACINTYRE, Alasdair. “How Moral Agents Became Ghosts.” 295-312.

道徳的行為主体が幽霊になった、という表題は、行為者の性格や行為者の欲求および性向の体系が道徳哲学における主な考察対象ではなくなったということの意味する。性格や欲求にかかわって、普遍的で定言的（つまり因果的前件を持たない）道徳原理に従うか否かの impersonal な根源的選択が考察対象となった。これによって心の哲学が倫理学から離れることになった。論者によれば、これはカントやリード以降に生じた事態である。この変化の跡づけが、ヒュームの情念論、実践的三段論法における wanting の位置づけ（ヒューム、アンスコム、アリストテレス）の検討などを通して行われる。カント・リード的な考え方と、それ以前のアリストテレス的な考え方（エートス乃至ヘビトッス、学ばれるべき欲求としてのブーレーシス）との対比が興味深い。積極的な打開策の提示はされていない。

DWORKIN, Gerald. “Reply to MacIntyre.” 313-318

マッキンタイアが立てたカント的考え方とアリストテレス的考え方の区別に対する反論。カント自身の考えはマッキンタイアが言うほどにアリストテレスと相容れないものではないとする。(竹山重光)

RORTY Richard. “Contemporary Philosophy of Mind” 323-348

mind-body, mental-physical といった区別は悪しき区別であり、mind という概念は曖昧なもの blur である。つまり、我々は mind そのものについて直観を持たず、mental なものの本性について特権的な与件を持たないのである。こういう考え方はライル以来、英米圏が誇るべき伝統となっている（これはライル・デネットの伝統と命名される）。本論文の目的はこの伝統に対して英米圏内部で提出されている異論（ネーゲル、サール等）を再反論することである。そのために、精神界と自然界の二元論に対するラッセルをはじめとしたライル以前の反駁及びその欠陥を通覧し、更にライル以降の logical behaviorism→central-state materialism→functionalism の移行と各々の論点を批判的に論述する（ここは非

常に示唆に富む)。そして最後に、前言語的な *real essence* についての知識を認めるネーゲル-サールの立場に対して、デネットの考えに若干変更を加えた上で、*mind* は *blur* であり *inffable* だとする反論が試みられる。

DENNET, Daniel C. “Comments on Rorty” 349-

デネットはローティが行った歴史的分析の大半には賛意を表するが、自分自身に対するローティの解釈には意義を唱える。ローティは第一人称が持つ或る非対称性を過小評価している、*the Given* を解体することが直ちにネーゲル、サールに対する十分な反論にはならない、特権的表現を破棄した上での新しい表象説が立てられ得るといったコメントがなされている。(竹山重光)

《以下は、“STUDIES IN THE PHILOSOPHY OF MIND”と題した *MIDWEST STUDIES IN PHILOSOPHY X* (1986) の特集より》

FODOR, Jerry A. “Why paramecia Don’t Have Mental Representations” 1-24.

筆者は、人間の行動を心的表象の持つ因果的な性質によって説明しようとする。このような立場に立つならば、有機体の行動を全て心的表象を使って説明することができ、かくして、人間も犬もゾウリムシも心的表象を持つことになる。この議論に対して筆者は、我々人間は心的表象を持つが、ゾウリムシは心的表象を持たないという直観を擁護する。その理由は次の様なものである。明らかに心的表象を持たないと考えられる有機体の行動は、法則的な (*nomie*) 性質によってのみ引き起こされる。従ってこれらの有機体の行動の説明には心的表象を要しない。これに対して、明らかに心的表象を持つと考えられる有機体の行動は、法則的でない性質によっても引き起こされ、このような行動を説明するためには心的表象が必要となる。それ故、ゾウリムシは心的表象を持たず、人間は心的表象を持つと考えられ、両者の間には、我々のこの直観を正当化するだけの違いがある。(染田 靖)

O'SHAUGHNESSY, Brain. “Consciousness” 49-62.

論者は意識という主題について、志向的意識や意識現象について分析するのではなく、眼り、麻酔状態、昏睡などとの連関に於ける広い意味での意識を解明しようと試みている。その際、論者は、我々が何ごとかを覚知している状態を「特定の意識」と名づけ、これを「意識の状態」と意図的に切り離す。後者はあらゆる生物がいつ如何なる特定の瞬間に於ても存在しているための論理的必然性であるとされる。即ち、思考や知覚、あるいは夢といった心理的現象が生ずるために必要となる一種の限界概念として意識を抱えようとするのである。こうして取り出された「意識の状態」は、1) 起きている状態、2) 眼り、3) (麻酔などに

よる) 無感覚の三つであり、これに加えて以上の三つのどのカテゴリーにも属さぬものとして催眠状態に挙げる。これら四つの状態が決して重なり合わぬものであることが、夢や感覚といった具体例によって示されている。(橋本武志)

SHOEMAKER, Sydney. "Introspection and the Self." 101-120.

広義の知覚概念——自己 a self と個的心的事象(および状態)の双方についての内観的 introspective 知覚を共に認める立場における知覚的概念——と、狭義の知覚概念——自己についての内観的知覚の存在を否定したヒュームの説を受け入れる立場における知覚概念——とを区別する。前者から後者へと知覚概念を言わば狭めて行く際に、以下の仕方を採ることによって、「ヒュームの否定」を正当化し得る、とする。すなわちその仕方とは、ある人が何かを知覚するということが、「彼の知覚している当の事物についての認識を本人はいかにして持つか」ということの説明の中に、入りうる、という仕方である。その際、その説明のどこに入るかといえば、それは、その事物を知覚することが当の事物を確認する情報を彼に与えるような場所、である。(戸島貴代志)

ROSENTHAL, David M. "Intentionality." 151-184.

論者は、思考と言語との密接な連関を踏まえた上で、思考が無ければそれを表現する言語もありえないという、思考の優位をくつがえそうと試みている。サルルらの提唱する思考の概念的優位が、実は因果的優位にすぎないという立脚点に立って論証が行われる。その際、思考の志向性を中心に議論が展開される。というのも、思考の志向性が本質的、根源的なものであり、言語の志向性が派生的なものであるとすると、思考の概念的優位が立証されてしまうからである。それ故、志向の本質性とは何か、思考の志向性は本当に本質的なのかという点が、議論の焦点となる。論者によると、言語についてはその物理的成り立ち(記号や発音)が取り沙汰されるが故にその志向性は派生的とされるが、思考にも物理的属性があり、志向性のみを思考の本質とするのは誤りである。また思考を発話の志向性の源泉とする考えにのっとって志向性を本質的・派生的と二分する考え方が批判される。(橋本武志)

BRAND, Myles. "Intentional Actions and Plans." 213-230.

意図的行為 intentional action とは企図 plan に従って遂行された行為である。企図とは心理的状态ではなく抽象的構造であって、企図を持つとはこの抽象的構造を表象することである。或る行為が先企図的 preplanned な行動パターンの一部であれば、その行為は、たとえ予め表立って想い描かれていなくても、意図的であり得る。また、企まれたプランのどこにも含まれない事柄が意図的行為の結

果となってしまう場合——例えば、医師が患者である婦人の命を救うために胎児を殺すような場合——があるが、この種の事柄のいくつかは、世界についての一般的な理論的認識によって、予見できる。

また、以上の見解は、ありのままの心理的事実を記述するだけの記述的立場と、あるべき心理的構造に言及する修正的立場とを、統一し得る、とする。

(戸島貴代志)

SWINBURNE, Richard. "The Indeterminism of Human Actions." 431-450.

「或る特定の信念のもとでの行為者の目的 purpose は彼の身体運動を引き起こす」こと、及び、「行為者の目的や信念はその行為者に生ずる物理的事象（ないし状態）とは別個の事象（ないし状態）である」ことの二つを仮定した場合、「人の行為には或る非決定論的要因が存在する」ことが証明できる。

或る単純な基本的行為 basic action——行為者が他の一切の行為を介さずに為す行為——について考えた場合、ときとして行為者は、しかるべき基本的行為を為さないことがある。それどころか彼はこの行為とは正反対の基本的行為をさえしようと試みることがあるのであって、この種の意図的試み——これは先基本的行為 prebasic action と呼ばれる——のもつこうした性格——これは countersuggestibility と呼ばれる——については、決定論は当て嵌まらない。

(戸島貴代志)

※ ※ ※

文献紹介の編集にあたって、浜野研三氏（京都大学助手）、鬼界影夫氏（京都大学研修員）両氏の御協力を得ました。この場を借りてお礼申と上げます。